

手術集中治療部

(1) 手術集中治療部の1年間

宮坂 勝之

はじめに

手術集中治療部の役割は、平成14年3月1日の開設に先立ち、病院内各所に散在する3000ヶ所の医療ガス端末の確認（二箇所で大変な異常発見）そして2月26日に始まった国立小児病院からの患者移送と、開設の基盤確保、後方支援の役割から始まった。

重症患者、急性期患者の総合診療部としての機能が期待される手術・集中治療部は、手術室、麻酔科、集中治療科、疼痛管理科、高度在宅医療科の5診療科（医長は3名）があるが、これらはいくまで形式的なもので実際には診療科の壁なく、スタッフおよびレジデントが一体となってチーム医療を行ってきた。さらにセンター開設直前で当診療部着任予定者4名が救急診療科勤務になったこともあり、救急部門も一体化した運営をしてきている。開設時に合わせて人員が確保できた数少ない中央サービス部門であったこともあり、院内搬送体制、電子カルテ、そして陣容が十分に揃わなかった総合診療部などの業務の補完に追われた1年間であったと振り返っている。

1. 手術室

緊急手術には継続して対応してきたが、手術室の本格的な機能は連休明けからであった。それでも手術室看護師、外科医も含め全く新しいチームとして大きな課題はあったが、看護師、外科医各位の理解と協力で効率の良い運用が行なえ、当初の予定を上回る年間3500例ペースで行なえた。一方で二次元バーコードによる手術器械管理など、対応が残されてしまった課題もある。しかし、完全一足制を含めた感染防御対策、小児患者では検査や処置でも麻酔、手術室使用が必要である認識、院内全ての麻酔を麻酔科医が行う、そして麻酔の安全の確保など、近代の病院では当たり前の臨床が定着したことは、初年度としての成果だと考えている。

2. 集中治療病棟

日本で最初の本格的な小児集中治療病棟の運用も比較的順調で、結果として年間500例を越える入室のペースでの運用が行なわれており、患者内容も多様で産科重症患者の入院も含め、社会の要請に応えられる方向性で出発できたと考えている。日本各地から、ヘリコプター搬送も含め患者転院希望も多いが、実際に十分に対応できるまでにいたっていない。海外とのテレビカンファレンスも含め、患者および家族にとって最良の医療の選択を目指し、「病気だけ」の治療に陥らないように努力してきた。わが国に小児救急医療を定着させるためにも、総合診療体制、チーム医療を根付かせるためにも、ICUが後方支援に徹することが重要だと考えている。しかし旧国立小児病院のNICUからなどの長期管理を一手に引き受けたこと、また慢性呼吸管理患者が一般病棟に散在したこともあり、患者の安全確保の面から、そして円滑な在宅医療への移行の面から、今後改善すべき課題も明確になった1年であった。特に患者の安全確保の面での細かな配慮と常識は、管理者も含め現在のわが国の医療の中では極めて理解されにくいといえた。

3. 鎮静検査処置

日本の小児医療自体が、構造的に検査優先社会であるにもかかわらず、小児患者の鎮静に関しては野放しである現状を憂い、患者の安全確保を第一に考えた院内の鎮静検査の窓口を麻酔科一本に絞る方式を発足させた。無原則な鎮静薬追加、誤嚥事故を防ぐための経口制限、患者モニターの徹底などへの理解は進み、一定の成果はあがった。しかし患者安全確保は目に見える保険点数に反映されないことから、労の割りに実が見えにくい領域でもあった。

4．無痛分娩

国立成育医療センターの軸の一つである母性医療の中で、無痛分娩は妊産婦の快適性だけでなく妊産婦の安全確保の面からも重要な課題だと考えている。全国的な視点で見た場合、無痛分娩の普及は自然分娩の1%台だとされており、欧米の70%台とは大きな解離がある。妊婦サイドはともかく医療従事者側への啓蒙も必要と考え、パンフレット作成も含め啓蒙に努めるとともに、地道なサービスを重ねてきた。幸い患者側からの反応は好評で初年度は全分娩の11%、今後相当な増加が予想される分野である。

5．高度在宅医療

在宅医療の中でも、人工呼吸管理を必要とする高度在宅医療への患者移行は、高度医療を行なう当センターでは積極的な取り組みが求められる。既に関係してきた症例に加え、当センターに移行後3家族の在宅医療への以降を行なうとともに、サマーキャンプなどのイベントを実施し啓蒙にも努めた。患者家族の情緒的な側面と、受容性を高めるためにも、テレビ電話の使用は有用であった。今後ICUと在宅医療を結ぶ中間医療施設の考えが定着すれば、より多くの患者が恩恵を受けられると考えられる。

6．救急および患者搬送

手術集中治療部は救急診療科と一体となって小児救急医療に取り組み、日常支援だけでなく、事故防止セミナーを開催、さらには小児医療関係者向けにPALSを取り入れてきていることなどは、救急診療科からの報告のとおりである。加えて手術集中治療部では、今年度心臓移植にかかわる海外への2名の重症小児患者搬送にかかわった。現在当センターは重症乳児症例の航空機搬送の経験を持った国内唯一のチームであり、今後もこうした症例との関係は続くと考えられる。さらに、救急部門の充実により、当院屋上のヘリコプター使用も含め患者搬送への関わりはますます重要となると考えている。

おわりに

手術集中治療部は基本的に麻酔科医による重症患者の総合診療部であり、患者およびその家族のあらゆる苦痛を安全に軽減する役割を持つサービス部門であると考えている。